

釣りに釣られて

高原英夫

第十一回 「ミミズかルアーか」

溪流釣りを始めたのは三十歳過ぎの頃だった。八戸市の釣具店で、流行り始めのルアーやスプーンやスピナーを見て買い求めたのだ。しかし、実際に師匠もいなくただながめていただけだった。青森へ転勤したら、職場に師匠がいて、すぐに釣行ということになった。

もつとも私の持っていた竿は、師匠のものにくらべ何とも心もとない代物で、初めから溪流のド素人そのものだった。ただ、八戸では磯釣りやら、船での釣りやら、馬淵川でのウグイ釣りなど、様々とやってはいたのだが、いわゆる疑似餌で魚を釣る、魚と人間の知恵比べとも言えるような言い方にどこか惹かれていたのだった。

初めは、師匠のUさんと私ともうひとり、三人で八甲田の山中に出掛けた。私はどこに車を置き、そこからしばらく歩き、流れに入り、どのくらい登り、どうしたのか、今考えてもさっぱり場所が特定できない。師匠の後をついていくのがやっとで、ただただ川の流れに足をとられ、また川底の苔に足が滑りと、何をしているの

かわからないというままに時間が過ぎていった。一度だけだったが、私のスピナーにイワナが反応し、ギラツと反転したのが見えた。一瞬のことだ。心臓が口から飛び出しそうな興奮が一気にきた。またくるのではと同じ場所で何度もやってみる。こない。師匠は

「もう、そこはダメ、先へ進むよ」

この言葉を何回も繰り返して、川藻が真緑に流れて揺れる中を次のポイントへと進んだ。

その日は師匠には二匹釣れた。初めて見るイワナの姿だった。

その後、二、三度、師匠と一緒に行ったが私の釣果はゼロだった。もつともルアーの操作などまったくといつてできていない私にとつては当たり前すぎる結果だし、そのことはどうのこうのと思ひもしなかった。何しろ投げたルアーが木の枝に引っかかるやら、引いているうちに川底に引っかかるやら、釣っている時間より、これの処理の時間が圧倒的に多く、この時間をまず正確に迅速にしなければどうしようもないことはすぐに理解できた。

ただ何度も行くうちに大きな疑問が残った。広い川の岸に立ち、フライのラインが逆光の中で遠くまで飛んで行き、ふんわりと水面に降りる様にとか、ある程度距離のある淵へ正確に投げ込み、沈め、アクションをつけながら引いてくる、青森の川をあちこち歩いてみても、なかなかそんな川に出会わないのだ。

ルアーは投げるといよりは、三〜四メートルを放るとい感じで、どうも按配がよくない。なるほど河口付近では広くなつてはいるが、釣れるのはハヤときいてる。

ミミズをエサにして魚を釣る人、穴場を教えない釣り人は最低で、最高は毛バリを自分で作つてから川へ出掛ける釣り師だというような事を、やはり開高健の本の中で読んだ覚えがある。今でも気持ちに引つかかるものがあるが、その後私はエサ釣りとの両刀遣いに転向した。

ルアー用もリュックに用意し、山奥の砂防ダムに出来た青濃く広がるプール。たどりつくなり、スピナーにすることにし、色を選ぶのもラインを結ぶのも逸る気持ちは変わらない。結んだつもりがハラツとほどけ落ちたりすると、指先が震えてい

るのだとわかる。

淵の暗みの少し向うへ投げ込み、イチ、ニー、サン、と数え、引き始める。キラキラとスピナーが回転しているのが見えている。

すると、スピナーに集中していた視線の外のそのまた奥から、すーつと真つすぐにスピナーに向つてくるもの、イワナが、迎撃ミサイルのような正確さでスピナーに接触する。グリーンと竿がしなり、ダムの堤に上げるまで、水面から高さを気にしながらぬき上げる。今でもスローモーションで見ている様な一連の動きがまざまざとよみがえってくる。確かに良い。

ただそれでもエサ釣りは、やはり青森の川に合っている。

ある夏の朝だった。娘が私の枕元で

「お父さん起きて、起きて」

と、かわいい声で呼んでいる。目を開けると指でタマクラミミズ（ドバミミズ）をつまみ、私の顔の前に突き出している。娘は、私が驚くものとばかり思っていたのだろう。

「何、これ、ミミズじゃない？」

「どこでとれた。連れていつてちようだい」

矢継ぎ早に問い、すぐ起きて、ミミズがとれた所へ連れていつてもらった。子供達が夏休みのラジオ体操をしている近くの広場だった。きれいに掃除されていて、その隅に木の枝や葉っぱがこんもりとした所があった。

「ここだよ」

娘が指差しし、私は足で葉っぱを払ってみた。いるいる。二〜三十匹は見えている。「良くやった」

私は娘を大きな声でほめてあげた。それまで釣りの度ごとにミミズを買いに行っていたが、一度、朝早く、山の奥で前日買ったばかりのミミズの入った袋をあげたら、みんな死んで細く垂れてしまっていたことがある。川虫など採つてやればいいのだが、あの時の落胆は伝え様がない。

エサを自給できることになる。これは強い。しかもタマクラは、水中で玉虫色に光り、絶大な効果がある。とくに少し濁った川では、光り方がまったく違う。一

度食いつき、針がかりせず水面から食いついたまま上がり、エサから口を開け放し、落ちたイワナでも、また食いついてくる、必殺のエサだ。一回の釣行には四十匹程度はいる。翌日が釣りとなると、一匹、二匹と数え、四十匹をそろえる。あちこちと蚊に刺され、ぶつくりと赤く腫れた跡がいくつもできている。しかし、もうこれではほとんど明日は「大丈夫」がかかっている。

青森市から西側の溪流はすぐ近くの小さな天田内川から始まり、蓬田、平舘、小泊、鱈ヶ沢、深浦と津軽半島の川はほとんど歩いた。根深誠の「みちのく源流行」
|| 路上社 || にはずいぶん世話になった。白石勝彦の「大イワナの世界」 || 山と溪谷社 || も私のバイブルみたいなものだ。

ただ、青森ではイワナの一般的なイメージ——深山幽谷の淵に潜み、用心深くエサをねらっている——は、ちよつと違う。もう海がすぐそこに見えている先でイワナはかかってくる。アメマスもいるが、あきらかにイワナだ。

Sさんと、K君とは特に良く出掛けた。いわばこの二人は私の弟子にあたる。Sさんは私より年上だが、娘が同じ小学校で、運動会に双方行つたのだが、雨で中止

になつてしまい、その時そのままイワナ釣りに誘い出掛けた。小さな堰堤で、Sさんのルアーに、少し濁った水の中で黄金色の腹をギラツとみせ、反転したイワナがいた。その日から、Sさんは今でも竿をふり回している。

私はひと頃、二人とは本当によく出掛け、小さな山奥の川を、互いに前になり後ろになりとかなり釣ってきた。ある時は二、三十匹になつたりしたこともある。四月の解禁の日から、九月の末日まで休日ほとんどを溪流釣りに明け暮れた。だから、何メートル先は倒木があつて、どこで右に曲がり、どこに淵がありと、手にとるようにわかる川が何本かある。だからここでは釣れる、釣れない。釣れなくても次に来る頃にはイワナは入っていると何となくわかるようになった。

そして、この小さな川の魚を釣り尽くしては絶対いけないと思つた。それ以来この十年以上、人にあげるためにイワナ、ヤマメは釣らない。家族分以内、家では四匹以内だ。それもだんだん春先のタラノメやウドの出る時だけに行き、しかも、大きな溜りのある山奥に山道を一直線に行き、一度竿を出して二、三匹いるのを確かめるだけで、あとは山菜を採り帰ってきている。

Sさんは、今でも山菜採り中心だが、秋田までサクラマスを釣りに行ったりと川釣りを続けている。

「今は、あの頃からくらべれば、型は小さくなつたし、数も上がらないし」

と、どんな釣り師でも嘆いている言葉を私に言う。

「そうだろうな。じゃまた五年はやめておくかな」

そう言つて私は山菜をもらった。

こうして、転勤で東京にいた年もあるが、都合十年は溪流に竿を出していない。

あの山道は崩れてないだろうな、あの曲がりは大水でえぐられてしまっているだろうとか、頭の中での溪流歩きで楽しんでいる。

平成23年5月